

終える命、

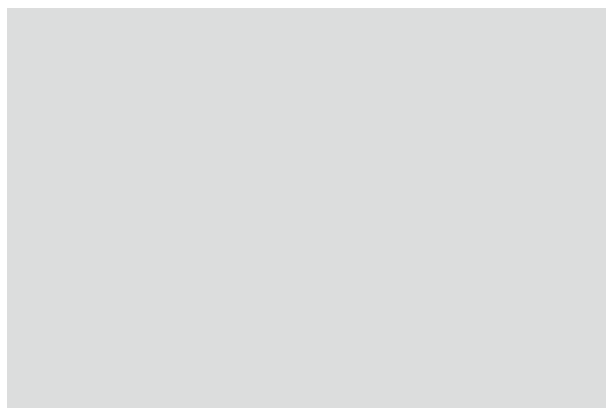
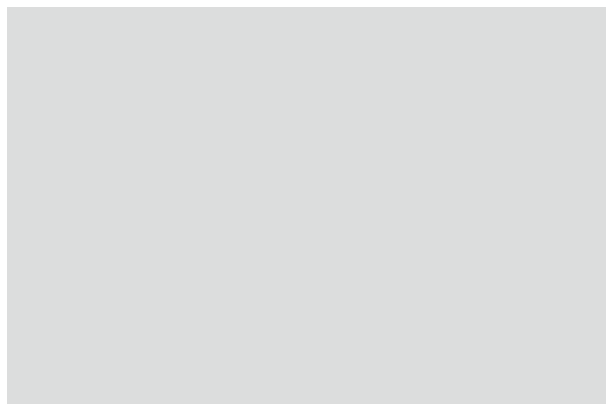
つなぐいのち

國
森
康
弘

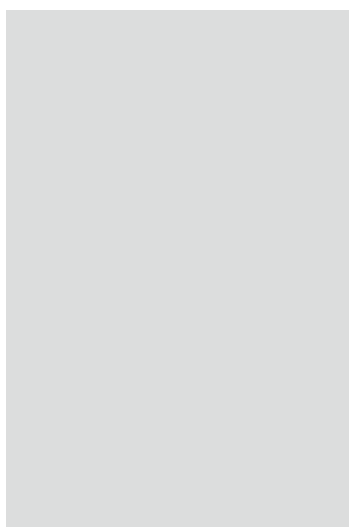
第14回 内に高まるエネルギー

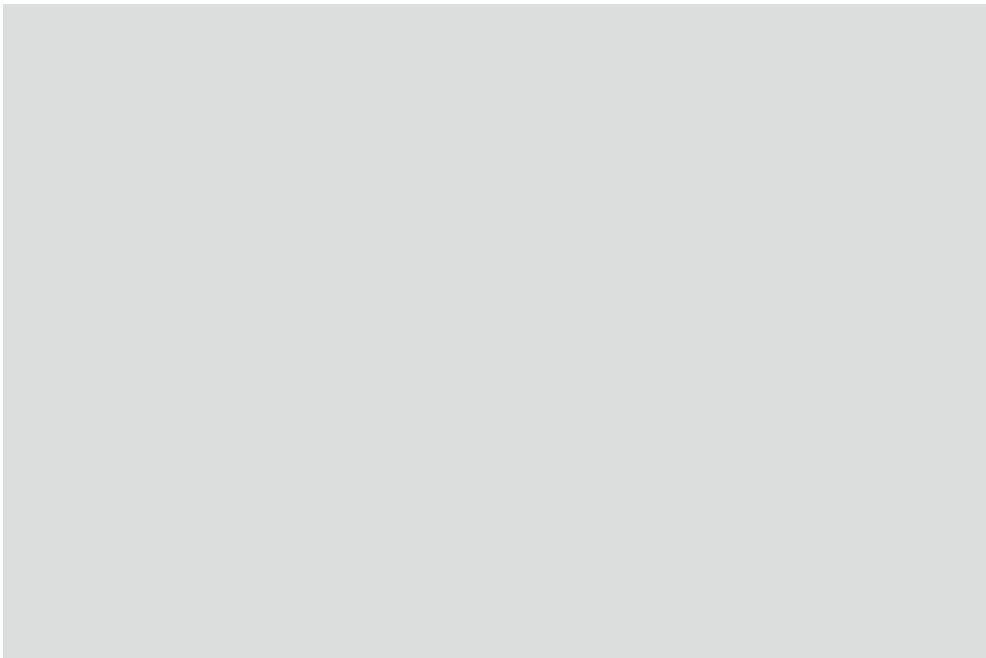
※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

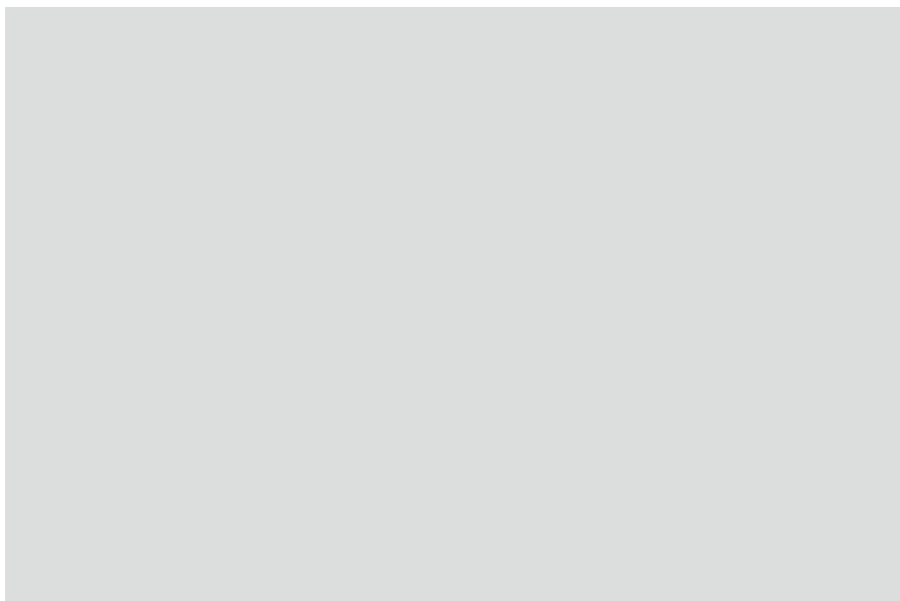
地域で当たり前
前に暮らしたい



施設を出て、町中のケアホーム「ともる」へ。個室暮らし。







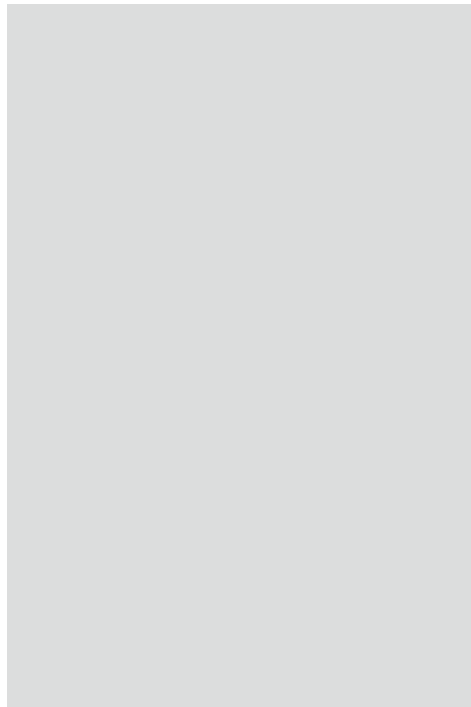
ア

ール・ブリュット。「生の芸術」を意味するフランス語で、障がいのある人たちがつくる芸術作品のことだ。幾千ものとの先に見る者の心に鎮座する陶土。1頭の動物のなかに無数の有機物が共生し、うごめく絵画。どこまでも細かく緻密で、規則正しいリズムのなかに、時に荒れ狂う心情まで写し込む切り絵……。表現者として、負ける。内に宿した、すさまじいまでの命のほとばしりが、

噴き出し、ぶちまかれ、作品を産み落とす。このエネルギーは、看取りの取材を始めて、とくに感じるようになった。それ以前の筆者は「死が近づくほど、あるいは老いや病、障がいが重くなるほど、できることがどんどん少なくなつて、弱り果てて、朽ちていく」と思い込んでいた。

だが、違う。これまでも見てきたように、古い、病、障がい、深まるほどに、生き抜くんとする力と自己表現せんとする力は、内に高まっていくようだ……。

「亡くなつただんなが迎えに来た」と言つて息を引き取るおばあさん。2、3年ぶりに1日だけ里帰した家族の前で旅立ったおじいさん。皆で看取ろうとこぞって取り囲んでいた家族親族が、ほんの少し、全員



が席を外したわずかな間に逝ったおばあさん。いずれも、深い愛情と意思が働いていたように感じた。

重症心身障がい児施設のびわこ学園に暮らす人たちも、内に秘めたエネルギーがすさまじい。ともに危篤になった際、曾祖母は亡くなり、難病を抱えるひ孫は一命を取りとめた、本連載の第4回（2015年7月号）で登場したなるみさんも、ここで生活している。

けんじさんは、部屋のカレンダーに書かれている文言をすべて暗唱する。引き出しの2段目の右奥隅、下から2枚目がどんな服かわかっている。何日の何曜日に何のテレビ番組があつて、その番組のマスコットキャラクターがどんなものかも知っている。CDの何曲目に、誰のどの歌が入っているかも知えてくれる。一見些細に見える。でも……、たとえ全身が動かないほど「重症」であつても、自分を存分に表現し、能力を発揮する場があれば、もつとずっと「豊か」だろう。

奥底からわき上がる神気。障がい者、高齢者といわれる人たち、そして寄り添う人たちが、自己実現しながら暮らしていけるよう、地域の真ん中でつながっていききたい。命のほとばしりは「輝き」として、そこにもともと存在する。筆者はその「光」を写真に写し込み、社会で共有したい。

〈2013年撮影〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。